



『観光の世界史』のノートから（８）

旅行ガイドブックの始まり

～マレーとベデカーのガイドブック・シリーズ～

帝京大学 観光経営学科

教授 石井 昭夫

ガイドブック（旅行案内書）を、旅行者に必要な情報を提供する出版物と広く考えれば、その起源は古代にまで遡ることが出来る。例えばギリシャ時代のヘロドトスは世界最初のトラベルライターとも呼ばれ、その著書「歴史（物語の意味もある）」は、ギリシャ・ローマ時代には旅の案内書として読まれていたし、下ってローマ時代のパウサニアスの「ギリシャ旅行案内」はまさに旅行者のためのガイドブックとして刊行されている。また、ヨーロッパの中世期に中近東からアフリカ北岸を経てイベリア半島まで支配していたイスラム・アラブ文化圏では、旅する人のための様々な案内書があったといわれている。

しかし、楽しみを目的とする旅行者を対象に、現在の人々が利用するのと同様の体裁と内容で国（地域）別にシリーズ形式で旅行案内書が出版されるようになるのは、鉄道によって旅が容易になり、旅行のための知識への需要が増大する 19 世紀中期以降である。

鉄道というハード誕生によって移動が容易になったとはいえ、旅をするために必要な情報というソフトなしに近代ツーリズムの進展はなかったであろう。そうした要請にこたえて、見知らぬ国や地域を旅するための情報を提供するガイドブックの刊行を始めたのがイギリスのジョン・マレーとドイツのカール・ベデカーであった。2 人はほぼ同時期にガイドブック・シリーズの刊行を始めており、創始者をどちらと見るかには異説がある。どちらにもそれぞれ理由があるが、筆者としては、ジョン・マレーこそガイドブックの創始者というにふさわしいと考えている。

1. ジョン・マレーのガイドブック・シリーズ

ガイドブックの生みの親とされるジョン・マレー John Murray (1808-92) は、父親の代にイギリス屈指の出版社になっていたジョン・マレー出版社の 3 代目当主だった。父は、ジェーン・オースチン、ウォルター・スコット、ワシントン・アービング、ロード・バイロンといった当代のそうそうたる作家を友人に持ち、彼らの著作を出版していた。

マレーは、旅客鉄道誕生前の 1829 年、大学を卒業する 21 歳の時、自己の教育の完成のためにヨーロッパ大陸への旅行を決意した。しかし、大陸の旅行情報としては、友人のソンマヴィル博士が提供してくれた都市や宿泊施設に関するわずかな覚書程度のほか何の手引もなかった。マレーは、実際に旅行してみて、情報の欠如がいかに旅の障害となるかを痛感した。その体験から、現地で自ら収集した知識見聞を後に続く旅人たちのために提供すること、すなわち旅のガイドブックを刊行することは、旅の容易化のために不可欠かつ

有意義な仕事であると確信した。

彼はただちに「イギリス人ツーリストが必要とするであろうあらゆる事実、報道、統計など」の収集を企て、3年にわたって旅行を継続した後、1836年、後年有名になった赤表紙版ガイドブック・シリーズ「大陸旅行者のためのハンドブック」(A Handbook for Travelers on the Continent)の第1巻『オランダ・ベルギー・ライン地方』と第2巻『フランス・南ドイツ・スイス』を続けて刊行した。この2巻はマレー1人で執筆している。

以後『スペイン』(リチャード・フォード)、『エジプト』(サー・ガードナー・ウィルキンス)、『北イタリア』(サー・フランシス・ポールグレイブ)などを次々刊行し、ガイドブックの創始者といわれた。なお、日本版は1891(明治24)年、バージル・ホール・チェンバレン(イギリス人の日本学者、1873年よ40年近く日本に滞在)の執筆により出版され、この初版には、日本中を旅したラフカディオ・ハーン(日本名小泉八雲、民話に基づく「怪談」など著作多数)やウォルター・ウェストン(「日本アルプスの登山と探検」の著者)等の日本通も寄稿している。

2. カール・ベデカーのガイドブック・シリーズ

カール・ベデカーKarl Baedeker (1801-59)は、ドイツ(プロシヤ)のエッセンで印刷業兼書籍販売店を営む家の息子として生まれ、1827年、自らライン地方のコブレンツで書籍の販売と印刷業を兼ねる出版社を設立した。1932年にコブレンツの別の出版社(Friedrich Röhlings)を買収したが、この出版社が1828年にJ.A.Kleinという人が書いた小本「ライン州旅行：マインツからケルンへの旅行案内」というガイドブックを出版していた。ベデカーはその版権を取得して、1932年に「ライン地方の旅」の名前で同書の新版(第3版に当たる)を刊行した。

この出版がマレーのシリーズ第1巻より先であることから、ベデカーを近代ツーリズムのガイドブック創始者とする説が有力とされるが、ベデカーのこのガイドブックは、クラインの著作を下書きにした改定版であり、地元コブレンツを含む狭い範囲の国内のローカル・ガイドブックに過ぎない。クラインのガイドブックはライン地方の総合的な旅行ガイドブックであったから、この本自体が最初の近代的旅行ガイドブックとする研究者もいる。しかし、ローカルのガイドブックなら、イギリスでも駅馬車の時代から刊行されていることを考えれば、最初のガイドブックとまではいえない。研究者にあえてベデカーをガイドブックの創始者とする人たちがいるのは、のちにマレーを凌ぐガイドブック出版者になったことが有利に働いたのであろう。

ベデカーが既存のローカル・ガイドブックを改訂して出版したのがマレーより数年早かったとはいえ、マレーのほうはそれよりはるか以前に「旅行者のための案内書シリーズが必要」とするコンセプトをもち、ゆえに情報の少ない外国旅行から始め、自ら時間をかけて取材して執筆している点、真の先駆者と言っていいだろう。これについては、ベデカー自身が1836年のマレーの2冊のガイドブックの発行に触発されて、自身もガイドブック・シリーズの刊行を志したと言っていることから考えても、マレーを近代的旅行ガイドブックの創始者とするのが妥当と思われる。

ベデカーもマレーにならって資料収集のため諸国を漫遊し、マレーより遅れること3年

の 1839 年、自身のコンセプトに基づくガイドブック・シリーズ第 1 巻「ベルギーとオランダ」を出版した。その後「ドイツ・オーストリア」、「スイス」、「パリとその郊外」など次々に刊行していく。

3. マレーとベデカーの協力と競争

いずれにしてもマレーとベデカーという 2 つのガイドブック・シリーズが 1830 年代の後半にはほぼ時を同じくして刊行され始め、ヨーロッパ諸国の鉄道の延長とともに、シリーズに取り上げられる国や地域の範囲も言語の種類も増えていく。

Alan Gresley の「ガイドブックの歴史」History of Guide Books（インターネット情報）によると、両者はしばらくの間競争者というよりは協力者であった。事実ベデカーの初期のガイドブック・シリーズの多くはマレーのガイドブックのドイツ語訳であったし、両者の協力関係を示すベデカーからマレーにあてた書簡がマレーのハンドブック関係のアーカイブズに多数保存されているという。

ただし、マレーのものが英語版中心であったのに対し、ベデカーのシリーズはドイツ語版だけでなく、1846 年からフランス語版のシリーズの出版を開始し、1861 年からは英語版の刊行も始めている。ベデカーが英語版の発行を始めれば両者の競合が避けられず、この時から両者の関係は協力者から競争相手となっていく。上述の「ガイドブックの歴史」によると、1850 年代後半から両者の間に徐々に溝ができるが、その理由はベデカーがマレーのガイドブックの情報のアップデート化が遅いことに批判的であったことと、ベデカーとマレーの間で同じ国（地域）のガイドブックの同一言語の出版はお互いに差し控えるという契約があって、ベデカーは英語版の刊行を遠慮してきたが、ベデカーの英語版発行を求め消費者の声が高まってきて、住み分けが限界にきたということのようである。

1859 年にカール・ベデカーが死去し、仕事を受け継いだ長男エルンスト・ベデカーは英語版の発行を希望し、マレーに「ライン地方の旅」と「パリ」の英語版ガイドブックを刊行したい旨の書簡を送ったところ、マレーは「ライン地方の旅」はもともとカール・ベデカーの本であり、1846 年にはフランス語版も発行されていることから快く同意したが、パリについては共同出版とすることを提案した。この結果 1861 年に最初のベデカーの英語版ガイドブックとして「ライン地方の旅」が出版され、また、最初で最後となるベデカー & マレーの共同出版で英語版の「パリ」が刊行された。

しかし、エルンストはその直後の 1861 年に死去し、変わって事業を継いだ次弟のカール・ベデカー Jr. がマレーとの契約を無視して独自に英語版の刊行を始めたため、両者の協力関係は断絶し、業界の 2 強による競争が始まったのである。

4. マレーとベデカーのその後

ベデカーの英語版の編集者はジョン・カーパトリックという人物で、彼が 1881 年まで担当した。この間ベデカー家では、1860 年代後半にカール Jr. の弟フリッツが共同経営者となっていたが、兄の死などを契機に後継者になり、1872 年に本拠をライプチヒに移転している。このフリッツ社長の元で非ヨーロッパ諸国（地域）のガイドブック発行を始め、英語版ガイドブック市場でもマレーを凌駕する発展を遂げ、ついには「ベデカー」といえ

ば旅行ガイドブックの代名詞になるほどの地位を築き上げた。実際、旅行ガイドブックを書くために旅行するという意味の『Baedekering』という英語まで生れたほどである。

この英語版の華々しい成功の立役者が、1881年にカーパトリックから英語版編集者の地位を引き継いだジェームズ James Muirhead (1853~1934)とフィンドレイ Findlay Muirhead (1860~1935)というスコットランド出身のミュアヘッド兄弟であった。以後二人は30年以上にわたってベデカーの英語版編集者として腕を振るったが、1914年の第一次世界大戦勃発によって、敵国となったドイツのベデカーを去って失職してしまう。しかし、翌1915年、マレーのハンドブックの出版権を買い取ってミュアヘッド出版社を設立して自らガイドブックの出版を志す。次いでフランス語版の出版のため、フランスのアシェット社との間で、英国とフランスで同名のガイドブック・シリーズのブルーガイド（イギリスで Blue Guides、フランスで Guides Blues）を共同で出版する契約を結び、第一次世界大戦終了直後の1918年に「ロンドンとその近郊」をシリーズ第1巻として発行した（同名の仏語版は1920年にフランスで発行）。これによって、マレーのガイドブック・シリーズはブルーガイドに吸収されて姿を消すことになる。なお、アシェット社との共同出版契約は長続きせず、1931年で終わった。

ベデカーはドイツの出版社であったため、20世紀の2度の世界大戦によって翻弄された。第一次世界大戦では、英語版成功に貢献したミュアヘッド兄弟と英語版市場を失ったし、続く第二次世界大戦では、ヒトラー政権が占領した国々のガイドブック刊行を強制された。1942年のドイツ空軍によるイギリス空爆でベデカーのガイドブックが爆撃目標を提供したと理由で、1943年、今度はイギリス空軍がライプチヒのベデカー本社を報復爆撃し、建物ともども資料類を破壊しつくすこととなった。

それでも大戦終了後の1948年に、カール・ベデカーのひ孫に当たる子孫がガイドブック発行の仕事を復興させたが、昔日の力を取り戻すことはなかった。

5. フランスのミシュラン・ガイドブック・シリーズ

第二次世界大戦後はマスツーリズムの時代となり、ガイドブックを含む観光情報の出版はブームとなるが、それ以前からマレーとベデカーに続くガイドブック・シリーズとして誕生し、21世紀の現代までユニークな旅行ガイドとして世界的な評価を得ているミシュランについて若干ふれておこう。

ミシュランの最初のガイドブックが1900年に発行されたことは観光史の事実としてよく知られている。といっても、これはタイヤメーカーの André Michelin と Edouard Michelin のミシュラン兄弟が、この年パリで開催された万国博覧会を機に作成したタイヤ購入者に無料で配布する宣伝用パンフレットのようなものだった。この時点で自動車を運転するフランス人はわずか2,400人ほどだったが、こうした先駆的な自動車愛好家にドライブに必要な様々な情報を提供するために作成されたものである。内容は、まだ少なかった自動車整備所やガソリンスタンドのリスト、医者リスト、都市の地図や観光の見どころなどであった。

ミシュランがマレーやベデカーのガイドブックと根本的に異なるのは、自動車旅行者を主たる対象としていたことで、それゆえに出版物も、ホテル・レストランガイド（赤ミシ

ュラン)、観光地のガイド(緑ミシュラン)、道路地図などへと幅広く展開していくことになる。

ミシュランのガイドブックは広告を一切掲載しないことで知られるが、最初からそうだったわけではない。1908年まではホテルや自動車整備所などの広告が載っていたが、この年、有料広告を掲載しては情報の中立性を疑われる恐れがあるという理由で一切の広告掲載をやめると宣言し、以降刊行物に広告は掲載されていない。

第1の転機は1920年にやってきた。この年の版から無料配布物でなく、有料のガイドブックとして販売するようになったのである。きっかけは社長がたまたま自動車整備工場でガイドブックの束が車軸を持ち上げる支えに使われているのを目にし、無料のものは粗末にされても仕方がないと考えたことから、有料化を目指すことになったという。有料にするにはそれだけの付加価値が必要で、客から提供された情報や覆面調査員による評価をもとに選んだ各地のレストランのリストを掲載することにした。当然ページ数が増え印刷コストがかかるので、有料にしても理解を得られると考えたのであった。さらに、この年の版から観光地の紹介記事に、「訪問する価値あり」(のちの緑ミシュランの3つ星に相当)とか「回り道して訪れる価値あり」(同2つ星)といった観光地の評価も始めている。ところが、ガイドブック有料化に対する客の反応は散々だった。今まで無料だったものに金を払う気はない、というわけである。

ミシュランは一計を案じ、各地の学校で生徒に期末の成績通知表を渡す際、最優秀成績者への表彰賞品として売れ残りのガイドブックを無料で提供したのである。これは大いに受けた。学校の最優秀表彰の副賞に使われたことはガイドブックのイメージアップに貢献し、翌年の版からはよく売れたという。

第2の転機は1926年であった。この年のガイドブックから推薦レストランに星マークがつけられ、さらに1931年からは1つ星、2つ星、3つ星という格付けが始まる。また、地域別観光ガイドブック、のちの緑ミシュランに発展するガイドブックが独立して刊行され始めたのも1926年であった。

ベデカーのガイドブックが第二次世界大戦のドイツ軍のイギリス空爆に使われたように、詳細なミシュラン・ガイドブックの記事や地図が1940年のドイツ軍のフランス侵攻のために使われた。時移り、1944年、ノルマンディー上陸作戦からドイツ軍追討に向かう連合軍は、フランスの都市の道路標識などをドイツ軍が破壊・撤去して進軍を遅らせようとすることを懸念して、ミシュランガイドの最新版(戦争前の1939年版)をひそかにワシントンで大量増刷して連合軍の部隊に配布するなどの対策をとったと記録されている。

平和の時代の観光客のために作成されたガイドブックや地図が、軍の侵攻にも使われる時代だったのである。